

子どものいる暮らし―男・夫・父

父親失格？

山本 政人

この四月から長男は小学生である。早いものだと思う。いつの間にか大きくなっていったという感じである。

振り返ってみると、大げさだが「よく生きていた」と思う。小さい頃からぜんそくがひどく、一歳のときから何度か入院し、現在もとき

どき通院している。三歳頃までは毎日のように発作が起き、朝晩二度吸入し（妻がやっていった）、風邪をひくとまた入院かとびくびくした。だんだん慣れたが、ぜんそくに加えて自家中毒であることもわかり、妻の苦勞も並大抵ではなかったと思う。

私は心配だけは人一倍したと思うが、妻の代わりに子どもの面倒を見ることはほとんどなかった。仕事とかいろいろ理由はあるが、最大の理由は子どもが私ではなく母親を求めた（と私が感じた）ためである。

入院したとき、母親が何かの用でそばを離れると、子どもは「ママ、ママ」と不安そうに母親を求めた。私は正直たまらなかった。私がそばにいても全然子どもの支えになっていないのである。頼りにならない父親。私にはこのことが一種のトラウマになった。そして知らず知らず子どもと距離をとっていた。子どもの病気に慣れたというより、それを傍観者的に見つめるようになった。そうしなければ耐えられなかったともいえる。子どもが苦しそうにしているのを、ただ見ていることしかできなかったのである。

長男は言葉が遅かった。病気がちなため、外に出ることも少なかった。もっぱら家でビデオを見たり、電車のおもちゃで遊んだりという生活では無理もないと思った。それでも三歳で二語文が出ていたので、あまり心配はしなかった。というより、言葉よりも身体のことか心配だった。私は長男を「こわれやすいガラス細工」のように思っていた。母親はそんな感じ方はしなかったはずだ。長男は病気をかかえつつ、それなりに強く育っていた。しかし私はそ



れを実感することができず、子どもがか弱い、危ういものとしか感じられなかった。私の方が「病氣」だったのかもしれない。

長男との関係が変わったのは、次男ができてからである。幸い次男は体質は似ているが元気だった。気質も長男とは正反対で、かんの強い、うるさい子だった。

たまたまそういう年齢に来ていたのかもしれないが、次男ができてから長男も変わった。親の気を引こうとするのか、わるさなどするようになった。普通の子どもらしくなったと感じ、少しほっとしたものである。二年保育で幼稚園に行くことになり、不安はあったが、休み休み通ううちに友だちもできた。

次男については私はのんきに考えていた。いくら何でも長男のようなことはあるまいと思っていた。次男は長男とは違い自分からこちらに

積極的にかかわりを持ってきた。私にも接触を求めてきた。母親がいないと激しく泣いたが、長男のそれとは質的に違うような気がした。不安で泣くのではなく、怒って泣くような感じだった。

しかし長男が自家中毒で入院したとき、妻が長男に付き添っていなかったため、次男は激しく泣いて泣きやまなかった。私は赤ん坊の次男をかかえて病院に向かいながら、途中で次男を捨ててしまおうかとさえ思った。阪神大震災の直後のことで、世の中が騒然とする中、家族四人ともインフルエンザにかかり、長男は自家中毒を併発し、悲惨な状況だったのである。結局、私と妻双方の母親に実家から出てきてもらい、交替で長男に付き添い、妻は次男の面倒を見、私は仕事に出ることができた。家族とはありがたいものだと思った。

長男はこの後（幼稚園に入る直前、ちょうど地下鉄サリン事件が起きたとき）も入院し、私はこの子はとも普通に生きていけないのではないかと悲観したが、実際はそれほど深刻ではなく、なんとか幼稚園に通うようになった。

私はその後何度か神戸を訪れた。復興の様子を見たかったからである。全然関係ないのだが、なぜか神戸の復興と長男の成長がつながっているような気がしたのだった。あれだけの大災害に見舞われても人々は強く生きていた。そのことが長男のことを心配する私を元気づけてくれたからかもしれない。

私は長男が三歳になるまで一緒に遊ぶということがなかった。一緒に遊ぶようになったのは三歳を過ぎてからだと思う。遊ぶといってもゲームをするのだが。

子どもが生まれる前から私はゲームが好き

だった。長男が生まれてからも暇があればゲームをしていた。そのためかどうか、長男も自然にゲームに興味を持ち、私がするのをそばで見ている。そのうち自分で動かすようになり、今では立派なゲーマーで、友だちからも一目置かれてる。

よくないことと思いつつ、これまでの成育歴を考えれば仕方ないのかもしれないとも思い、子どもと一緒にゲームを楽しんでいる。妻もそうしている。身体が弱いという意識があるため



か、やはり過保護になっっているのかもしれない。子どもが求めるものは与え、好きなことをさせている。そのためかどうか、長男は生活面ではだらしない。おもしろいをする。着替えができない。片づけや整理整頓もだめ。はなはだ心許ない。親としては悩みは尽きないに違いない。

このように長男に対しては今日に至るまで父親らしいことをした覚えがない。私自身、幼い頃父親と遊んだ記憶がない。父は船乗りで、しかも外国航路だった。日本には年に一度ちょっとだけ帰ってきて、それも船にいて家には帰ってこなかった。母は幼い私を連れて、横浜や兵庫県の相生、山口県の岩国などの港へ会いに行ったものである。船室で騒いでよくしかられたことだけは覚えている。

しかし父との仲がずっと疎遠だったというわ

けではない。子どもの頃はともかく、大学生になってから父とよく遊ぶようになった(大人の遊びだが、変な遊びではない)。子どもの頃の父は頭の中の存在だった。実際はそうではなかったと思うが、「かっこいい」父を勝手に想像していた。父と遊ぶようになってからは「かわいい」父だと思った。一緒に遊んでみて、陽気な子どものような父だということがわかったのである。

長男は初めての子で、私としても戸惑いがあった。おまけに病気がことがあってどうしていいかわけがわからなくなってしまったように



思う。それに比べて、次男の方は結構うまく
いっているように思う。前にも述べたが、幸い
次男はあまり病気をせず、私に対して積極的に
かかわってきた。おとなしい長男に比べ、気性
の激しい子である。私としては長男のことがあ

るだけに、次男の激しさはむしろ頼もしい。妻
にいわせれば「育てにくい子」で、確かによく
泣き、手のかかる子である。しかしそれが「子
どもらしい」感じがする。出来の悪い子ほどか
わいいというが、それなのかもしれない。

性格は対照的な兄弟だが、している遊びはよ
く似ている。次男は今ミニカーを並べるのに
凝っているが、長男がやはり二歳頃同じような
ことをしていた。そして次男は今ゲームに目覚
めつつある。自分でスイッチを入れて、画面を
食い入るように見ている。長男がするのをよく
見ているから、感化されるのも当然であるが、

子どもが子どもに与える影響にははかりしな
いものがある。もちろんゲームだけではない。
何でも上の子の真似をする。生活面のだらしな
さまで似てしまわないか心配である。

結局、私は父親として特に長男に対しては
「子育て」らしいことをしてこなかったような
気がする。結果的には妻にすべて押しつけた形
である。批判されても仕方がないと思う。しか
し子育てに参加できない父親の寂しさをわかっ
てほしいという思いもある。勝手だといわれれ
ばそれまでだが。

(お茶の水女子大学)